第４章　フォニックスと音読指導

4.2　リーディング力の基礎となる音読力

4.2.1　中学生がリーディングの際に戸惑う点は？

2011 年度より..

①小学校＝BICS(基本的対人伝達能力：Basic Interpersonal Communicative Skills)レベル

②中学校＝CALP(認知・学習言語能力：Cognitive Academic Language Proficiency)レベル

を、学習する。

①音声中心で、１文が短く、文字を介在せずとも範読を聞いて１文全体を覚えられる

※長いと分からないという生徒もいる

②抽象的な思考が要求される認知活動と関連する能力を意味し、１文が長く複数のチャンクや節で成り立っており、範読だけでは１文を覚えることができず、文字を読もうとしてもたどたどしくなる。

⇒英文を丸暗記できなくなるに従って、「(すばやく)音声化できない」「チャンクを見つけられない」という問題がでる

⇒☆<u>フォニックス・ルールを活用して単語やチャンクを素早く読み、理解できる練習、文の意味をすばやく掴むことができる練習を行う</u>

4.2.2　単語やチャンクへの意味アクセススピードを速める音読練習(P128：表)

＊クイックレスポンス：口頭で英語から日本語、日本語から英語へと素早く変換していく訓練

＊フラッシュカード　：単語や日本語訳が書かれたカードをフラッシュさせて単語やチャンクへの意味アクセススピードを高める

4.2.3　クイック・レスポンスの手法を用いた単語の練習法(P128)

4.2.4　フラッシュカードを用いた単語の練習法(P130)

4.2.5　文をチャンクごとに理解するスピードを速める音読練習(P132)

［クイックレスポンスの文レベルの手法］

基礎知識(３)　フォニックスとは？

１．英語の読み書き

(1)英語母語話者の場合

アルファベットは文字の名前とは別に、文字が表す音があり、A から Z まで言えても単語が読めない。そのため英語は他言語と比較して、識字能力の獲得に時間がかかり、小学校３年生でも読み書きに問題が残る場合もある。したがって、英語圏では小学校入学前後から、明示的体系的な読みの指導がはじまり、子供たちは数年かけて完全な習得を目指す。

⑵日本語が母語で、日本語が読める場合

日本語は、例えば「あ」はいつも同じ音を示すため３歳前後で文字の音読が始まり、小学校入学時には文字の読み書きができる生徒が多い。そのため、日本語の「読む」ことの難しさは最近まで認識されず、英語でも、文字指導の重要性は軽視されてきた。結果的に、未習の単語は読めないと信じられてきた。

２．読みの指導の前に

「アルファベット原理」が理解できていることが読み学習の前提条件。

＊話し言葉⇒書き言葉

「さかな」（３つの音節）⇒それぞれを表す文字がある

「fish」（３つの音素）⇒それぞれの音がアルファベット文字に対応する

３．音韻認識(phonological awareness)と音素認識(phonemic awareness)

＊音韻認識(phonological awareness)

聞こえてくる一固まりの話し言葉⇒単語⇒

音節(candy=can+dy)・オンセットとライム(black=bl+ack)⇒音素(red=r+e+d)

以上のような認識をすること。

(イントネーションやアクセント、ライミングがわかることもこれに含む)

＊音素認識(phonemic awareness)

音韻認識の中でも単語が音素の集号であることを認識すること

※ネイテイブスピーカーでも、中高生で正しく速く読むことができる者は優れた音韻認識力を有することがわかっている(Shaywitz,2003)

４．英語圏での指導方法

⑴フォニックスアプローチ(Phonics approach)　1970年代～90年代　ボトムアップアプローチ

フォニックス：音とアルファベット文字の対応規則と、その規則を使って読んだり書いたりすることを明示的、体系的に指導する方法。

（Chall,1967）「ディコーディング(文字を解読するための指導)は必須であり、フォニックス指導が最適」

（Ehri,1998）「英単語を音読する５つの方法のうち、以下ふたつを指導する方法がフォニックスである⇒１、１つ１つの文字が表す音を足して、単語として読む　２、頻出する文字列が表す音を利用して読む」

＊熟達した読み手にとっても、語や文を記憶しておくため、音読の誤りの自己修正のためにディコーディング能力は不可欠。

(2)ホール・ランゲージ・アプローチ(Whole language approach) 1990 年～2000 年

トップダウンアプローチ

Goodman(1967)「心理言語学的な見地から、書きことばを理解することが読むという行為の中心で、話すことと同様、読むことも自然に獲得される。」

絵本などのオーセンティックな読み物を活用する方法の基礎。

(3)バランスト・アプローチ(Balanced approach) 2000 年以降

両方を取り入れた指導法が推奨される。

基本概念

１．様々な方法で指導

２．音韻認識能力とアルファベット文字の仕組み理解

３．フォニックス指導によるスペリング力や単語分析能力

４．意味理解のために読む

５．豊富に読書を楽しみ、想像的論理的思考力を育てる

５．日本の英語学習者への読みの指導

英語が苦手な学習者は読み方を知らない場合が多い。

英語母語話者の語彙習得については、文字をおとに変換して反復する能力(音韻処理能力)が重要な役割を果たすことがしられている。(ワーキングメモリの下位システム)

カタカナ読みの変換では問題が生じる。

６．日本でのフォニックス指導　小中高の連携

日本で英語の読みを学習する場合の、母語話者との大きな違い

(１)話し言葉を獲得した上で読みを学習するのではなくほぼ同時進行

(２)日常的に英語に触れる機会希薄

⇒フォニックスのルールを指導すべき。その後アルファベット指導へ。

現在、現場で指導されているのは Synthetic Phonics が多い。他に onset と body が類似するものを集めて指導する方法もある。

７．フォニックス・ルール　p140　表２

８．スローラーナーの支援について

日本では読みの学習の難しさが理解されにくい上に、英語学習では、学習者に問題があるのか指導者に問題があるのか判断が必要で、取り上げられない。

視覚面や音声面での問題を抱える子どもに対し、初期段階で補足的な指導をすることで補える。

【感想】

中学の教科書を見てみても、フォニックスルールは載せられていない。高校と違い、ある程度時間的余裕がある中学の英語学習初期段階でこれを導入することはとても意味のあることだと思う。もしくは、小学校での英語教育が本格化していく今、単純なアルファベット指導や、ありきたりなフレーズ指導に留まることなく、フォニックス指導も必要になるだろうし、この段階で習得できれば、それ以降、アウトプットにもリスニング問題や発音問題にも応用できるだろう。